

「保育に活かす自己評価」という考え方

1. 誤解の多い「評価」という言葉

- ・「評価」≠「評定」 * 評価と評定は違う ⇒ ランク付けのための評定を目的としているのではない
 - ・「自己評価」≠「反省」 * 反省することが自己評価ではない ⇒ ダメ出しをすることが目的ではない
- ↓
- ・「自己評価」=「アセスメント」(現状を捉え、改善や手立ての方向性を考えていくための評価)
 - * 次への手立て・方向性を考えるために、現状を把握する(現状を一度立ち止まって振り返る)こと。
 - * 指導の過程・保育実践を振り返って、指導計画や保育実践の改善に活かしていくことが「自己評価」。

(参考)

① 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』『幼稚園教育要領』における「評価」の位置づけ

その際、園児の実態及び園児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程についての評価を適切に行い、常に指導計画の改善を図るものとする。

その際、幼児の実態及び幼児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程についての評価を適切に行い、常に指導計画の改善を図るものとする。

② 『保育所保育指針』の「自己評価」位置づけ

保育内容等の評価—保育士等の自己評価

(ア) 保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自らの保育実践を振り返り、自己評価することを通して、その専門性の向上や保育実践の改善に努めなければならない。

③ 「園児の理解に基づいた評価の実施」(『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』より)

園児一人一人の発達の理解に基づいた評価の実施に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

ア 指導の過程を振り返りながら園児の理解を進め、園児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること。その際、他の園児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意すること。

イ 評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、次年度又は小学校等にその内容が適切に引き継がれるようにすること。

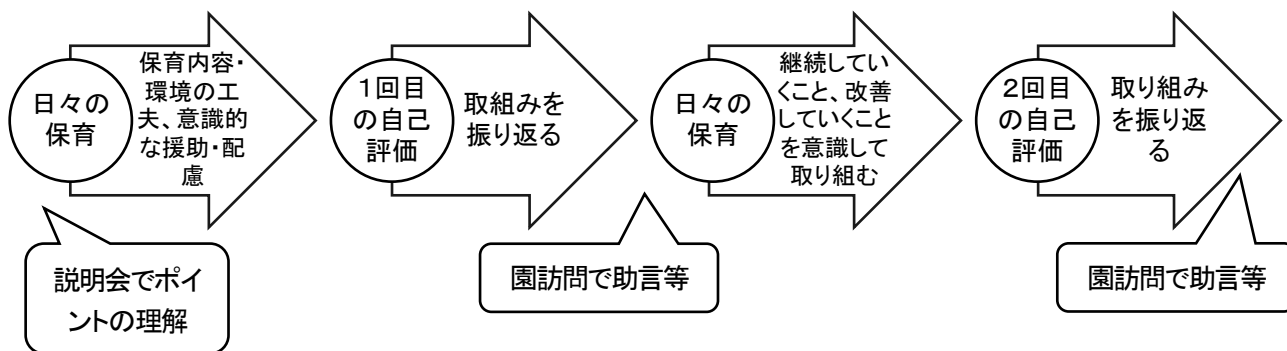
④ カリキュラム・マネジメントのためには、園全体での「評価と改善」が大切

各幼保連携型認定こども園においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育及び保育の内容並びに子育ての支援等に関する全体的な計画を作成すること、その実施状況を評価して改善を図っていくこと、また実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育及び保育の内容並びに子育ての支援等に関する全体的な計画に基づき組織的かつ計画的に各幼保連携型認定こども園の教育及び保育活動の質の向上を図っていくこと(以下「カリキュラム・マネジメント」という。)に努めるものとする。

⇒ 「自分たちの保育の強み(していること、できていること)は何だろうか?」ということを見出すとともに、「もっとより保育を進めていくためには、どうしたらいいのだろうか?」という改善の方向性を見出していくことが大切。その方向性を見いだせたら、具体的に何をどうするかという手立てを考えて実行する。

⇒ 「自己評価」を通して「改善のサイクル」を回して、保育実践の質の向上を図っていく。

2. 自己評価の流れと、改善のための手立て（園に活かせる評価のための手立て）



3. 担任レベルで意識しておきたいこと（教育・保育内容に関する自己評価）

★ 自己評価の項目は、「西脇市就学前教育・保育カリキュラム」に基づいて作られている。

(1) すべての年齢（学年）の自己評価項目の文末語尾に注目する。

○養護

～していけるようにしている／～ようにしている／～できるようにしている／～を図っている など

○5領域

・物的環境や場の視点

～環境を工夫している／～のような環境構成している／～の環境を作っている／～の環境を準備している

・関わり、援助の視点

～するように工夫している／～ように関わっている／～の意欲を育てている／～気づくよう援助している／～という気持ちを大切にしている／～知らせている／～仲立ちしている／～応答している／～ように配慮している

・遊びや活動の視点

～ように様々な表現遊びを取り入れている／～ような保育内容を工夫している／～する機会を作っている

⇒ 意識しておきたいこと

- ① 子どもに対する評価ではなく、自分自身の保育（関わり、環境構成、遊び・活動）の内容に対する自己評価
- ② 「関わり・援助・配慮で自分が意識していることはどんなことか？」「環境構成や環境の工夫などで自分が意識していることはどんなことか？」「保育内容（遊びや活動の内容）で自分が意識していることはどんなことか？」について振り返ることが大切。
- ③ ここでの自己評価は、「数回取り組んだ（実施した）」というよりも、「毎日や継続して取り組んでいること（実施していること）」を捉えて振り返ることが大切。

(2) 自己評価の視点

前期実施状況 / 後期実施状況

評価A・・・	十分できている（十分実施している、十分配慮している、様々な工夫をしている）
評価B・・・	おおむねできている（おおむね実施している、配慮している、工夫をしている）
評価C・・・	やや不十分（実施のための体制を作ったり、工夫を考えるなどを検討した方がよい）
評価D・・・	実施していない（実施ができるように体制づくり等を検討する必要がある）

1) ABCDの判断について

○「実施している」は、「保育内容（遊びや活動の内容）」に対応。

→ A（十分）は、ほぼ毎日のように、継続的に日常的に実施している。

B（おおむね）は、Aほどではないが、1週間に3回程度（半分以上）は、実施している。

- C (やや不十分) は、1週間に1～2回、あるいは1か月に数回程度実施している。
D (実施していない) は、0回、あるいは数か月に1～2回程度の実施状況。

○「配慮している」は、「関わり・援助・配慮」に対応。

- A (十分) は、ほぼ毎日のように、継続的に日常的に配慮している。
B (おおむね) は、Aほどではないが、1週間に3回程度 (半分以上) は、配慮している。
C (やや不十分) は、1週間に1～2回、あるいは1か月に数回程度配慮している。
D (実施していない) は、0回、あるいは数か月に1～2回程度の配慮。

○「工夫している」は、「環境構成や環境の工夫」に対応。

- A (十分) は、ほぼ毎日のように、継続的に日常的に環境構成したり、工夫している。
B (おおむね) は、Aほどではないが、1週間に3回程度 (半分以上) は、環境構成したり、工夫している。
C (やや不十分) は、1週間に1～2回、あるいは1か月に数回程度環境構成したり、工夫している。
D (実施していない) は、0回、あるいは数か月に1～2回程度の環境構成したり、工夫している。

2) 前期実施状況について

前期よりも、後期の方がA・Bの自己評価が増えることが理想。

前期Aだった項目は、後期もAになるように継続して取り組んでいく。

前期Bだった項目は、後期にAになるためには、どうするとよいかの見通し (取組の方策) を考えて取り組む。

前期C・Dだった項目は、後期に1つでもB・Cになるためには、どうするとよいかの見通し (取組の方策) を考えて取り組む。

3) 後期実施状況について

後期実施状況については、前期の実施状況以降、意識して取り組んできたことを中心に自己評価していく。それを踏まえて、次年度にどう取り組んでいくかを考えて書く。その学年の子どもたちが1つ学年進行した視点、あるいは、次年度、その学年を担当する場合を想定して書く。

(3) 例から考える

3歳児の領域「健康」・・・「基本的な運動能力を身に付け、身体を動かす楽しさを味わっている」

→ たとえば、どんな遊びや活動をしていますか？

- ・外遊びで体を動かす遊びを毎日のようにしている場合、前期実施状況は「A」と記載し、取組の状況に (記入の参考例) のように数行程度記入する。
- ・前期実施状況を「C」と記入する場合、「外遊びで毎日体を動かす遊びをしたいと考えているが、1週間に1～2回、外遊びをしている程度のため。」のように、「C」と判断した理由を書いてもよい。

0歳児の領域「環境」・・・「身近なものや自然物に興味や関心を持ち、喜んで見たり、触れたり、聞いたりなど五感を通して自らかかわろうとするよう環境の工夫をしている」

→ たとえば、保育室に、どんな保育環境 (物的環境、遊具、玩具など) がありますか？

月齢の差が大きい時期ですが、子どもが五感を通して自らかかわろうとすることができるようなものは何があるでしょうか。毎日それを用意していますか？ 毎日の継続の中で工夫をしていますか？

→ まず前期実施状況は、自信をもってAもしくはBを付けられる項目を中心に、3項目を選んで、「取り組んでいること」は遠慮せずに明確に書く。「何をしているか」「どのようにしているか」「どの程度しているか」の3点を意識して、2～3行程度でまとめる。長くても5～6行程度とする。

後期実施状況のときには、前期の3項目以外も意識して、多様な視点から書く。いずれにしても、A B C Dの自己評価として判断した理由が第三者に伝わるように書くことが大切。